

目 指 す 学 校 像	学校・家庭・地域が信頼の絆で結ばれた、ぬくもりのある学校
-------------	------------------------------

重 点 目 標	1 個別最適な学び、協働的な学び、探究的な学びの推進による学力向上 2 安心・安全な学校に向けた教育支援・相談体制と学校行事等の充実 3 学校・家庭・地域の組織的・継続的な連携・協働体制による地域とともにある学校づくり 4 タブレットを効果的に活用した授業改善に向けた教職員研修の充実
---------	---

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、
方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成 (8割以上)
	B	概ね達成 (6割以上)
	C	変化の兆し (4割以上)
	D	不十分 (4割未満)

学 校 自 己 評 価								学校運営協議会による評価
年 度 目 標						年 度 評 価		実施日令和7年2月18日
番 号	現 状 と 課 題	評 価 項 目	具 体 的 な 方 策	方 策 の 評 価 指 標	評 価 項 目 の 達 成 状 況	達 成 度	次 年 度 へ の 課 題 と 改 善 策	学校運営協議会からの意見・要望・評価等
1	〈現状〉 ○各教科の基礎・基本の内容の習得が不十分な児童が各学級に一定数見られる。学習の理解がやや優れている集団と理解が不足している集団に分かれている。 ○学力調査の結果では、国語が全国平均を上回るものの市平均をやや下回っている。算数が全国平均、市平均のいずれも大幅に下回っており、習得できていない児童が多数見られる。 〈課題〉 ○国語の思考力、判断力、表現力等に課題が見られる。 ○算数は、全単元で習得すべき基本的な内容が習得されていない。学習習慣が定着できていない児童も多い。「数と計算」「図形」「測定」「データの活用」等の知識・理解、思考力・判断力・表現力を高めることが喫緊の課題である。	・個別最適な学びの推進	①児童一人ひとりが主体的に学習できるように、学習のめあてをたて、自ら見通しをもちながら学習を進める。 ②ICT機器を活用し、個に応じた学習課題に取り組みるようにし、児童の理解度や習得状況に重点を置いた指導を行う。 ③教科横断的な学習を通して、「自ら問いを作る」「自ら探究する」など、課題解決学習に取り組む。	①「学びの指標」の個別最適な学びに関する項目で肯定的評価が8割以上になったか。 ②国語（漢字）（読むこと・書くこと）・算数（知識・技能）の学期末テストの平均点が8割以上になったか。 ③SDGsに関するテーマを策定し、主体的な探究活動を実践できたか。	①「学びの指標」の個別最適な学びに関する項目「個の習熟に応じた支援」は、3.42で肯定的評価は85.5%で達成した。 ②国語は、各学年8割から9割である一方、算数は、低学年8割半から9割に対して中学年で7割から8割程度と低下している。 ③「自ら問いをもち、自分の考えを基に、主体的・協働的に探究する新開っ子の育成」をテーマに策定し、SDGs17の目標と関連付けて取り組む研究計画を立て、実践した。	A	①中学年以上で教科担任制を実施し、教員の専門性とICTの効果的な活用に基に、授業の質の向上を図る。 ②国語と算数は、15分モジュール授業を朝の時間に導入し、基礎的な内容の習熟を図る。 ③校内研修でSDGs17の目標に合わせた評価指標を策定し、達成度をルーブリックを参考にした5段階評価システムを作成する。	算数は、学年によって中央値と平均値がずれており、ヒストグラムにすると山が二つあるなど、学年内学力格差があることがよくわかった。それについては支援が必要ではないか。人員を配置できるのであれば、そういう対策も視野に入れてほしい。また、個別最適な学びを保証して、個に応じた支援を図っていく必要がある。教科担任制については、保護者目線で考えても、確かに学力向上につながるのではないかと感じる。私たちの時代では、中学校で教科担任制はあったが、小学校でも進められるのはありがたい。
		・協働的な学びと探究的な学びの推進	①SDGs教育並びにユネスコスクールに関する協働的な学びや探究的な学びについて外部指導者を招聘し、カリキュラム・マネジメントを進める。 ②探究を進めるにあたり、自ら考え、記録をまとめ、調べたことを発表する機会、児童同士で話し合う時間等を十分に確保した授業を展開する。	①協働的な学びや探究的な学びについて外部指導者を招聘として、教職員研修を実施し、学年ごとの教科横断のカリキュラム・マネジメントを策定できたか。 ②「学びの指標」の協働的な学びに関する項目で肯定的評価が8割以上となったか。	①埼玉大学宇佐見教授と芝浦工業大学中口教授を招聘し、教職員研修を実施し、カリキュラム・マネジメントを策定した。 ②「学びの指標」の協働的な学びに関する項目「多様な学習集団の編成」は、3.33で肯定的評価は、83.25%で達成した。	A	①中口教授が提案しているユネスコスクールのカリキュラム・マネジメントを総合的な学習の時間を中心に展開する。 ②「自分事として捉える」「進んで活動する」「協働的に取り組む」工夫をして育成すべき資質能力を育む。	
2	〈現状〉 ○学習面に著しい困難さを示す児童や長期欠席となる児童がおり、家庭と連携しながら個別的な対応を行っている。 ○他者との円滑なコミュニケーションが苦手、些細なことから生じる対人トラブルを自らの力で解決することが苦手な子が見られる。 ○心と生活のアンケートの結果、要面談児童が各学級に複数おり、元気が低い子、いじめ被害を訴える子、解決スキルの低い子、自尊感情の低い子が見られる。 〈課題〉 ○不登校児童の欠席の長期化に対して、家庭との連携が難しい。専門機関につなげる必要のある児童も見られる。 ○いじめの認知を積極的に行うことが必要である。また、児童の指導を行っても、なかなか解消しないケースがある。 ○感情のコントロールが苦手で衝動性が高い児童の問題行動への支援策が必要である。	・児童一人ひとりへの細やかな教育支援・相談に向けた校体内体制の充実	①児童の行動の過去の記録や家庭の状況等児童理解に関する過去の記録や相談資料等を確認する。 ②校務用端末を活用して児童や保護者のアンケートや面談等の記録を残す。 ③スクールダッシュボードを活用し、支援が必要な児童には、保護者と連携し、関係機関とのケース会議を行うなど専門的な立場からの助言をもらいながら改善していく。 ④必要に応じて個別の指導計画を作成する等、合理的配慮を行っていく。	①担任が蓄積された過去の記録や相談資料等を確認したか。 ②スクールダッシュボードを活用し、支援が必要な児童の保護者連携ができたか。関係機関とのケース会議を実施したか。 ③学校自己評価に係る教育相談に関連する項目の肯定的な回答の割合が児童アンケート97%以上、保護者アンケート90%以上、教員アンケート100%以上となったか。 ④保護者のニーズに応じて、個別の支援計画及び指導計画を作成したか。	①個別的教育支援計画や指導計画に必要な児童に作成し、それをもとに児童理解研修で共通理解した。また、SCやSSWと連携し、教育相談の組織的な対応を行った。 ②睡眠や食事、元気度等を確認した。児童相談所や特別支援ネットワーク連携協議会等のケース会議を実施した。 ③学校自己評価に係る教育相談に関連する項目の肯定的な回答の割合が児童アンケート96%、保護者アンケート92%、教員アンケート98.75%となった。 ④保護者のニーズに応じて、個別の支援計画及び指導計画を作成した。	A	①特別支援教育と教育相談をさらに連携できるように特別支援教育コーディネーターを2名配置し、通常の学級の特別支援教育情報を共有する。 ②スクールダッシュボードの学びの機能を生かした相談業務を構築する。 ③教育相談と生徒指導の情報をさらに密接に共有し、児童の非行問題行動およびいじめ対応に適切に対応できるようにする。 ④新入学児童の幼保小連携を充実し、切れ目のない支援を行えるように個別的教育支援計画を継承する。	学習面以外の相談について、教育相談日だけでなく、「心と生活のアンケート」後の面談や「あのねカード」により、児童が直接相談をもちかけるケースなど、数多くの相談窓口があることは、子どもたちにとっても安心できるのではないか。不登校児童については、要因は様々であることが改めてわかった。保護者対応については、働き方改革の観点からも、我々学校運営協議会委員が、相談役になることもいいのではないかな。保護者側の意向も当然あるかと思うが、年度初めに示しておくという案はどうか。子どもを育てるのは、学校だけではなくの、地域の人間の立場からすると、先生だけが矢面に立つのを見てられないという思いである。
		・児童が主体となって取り組む学校行事等の充実	①いじめ撲滅や、人権問題における児童主体の取組を実施する。 ②児童会を中心としたあいさつ運動、ペア学級によるなかよし遊びを行う。また、係や当番等学級内の組織を基盤とする活動を活発に行えるようにする。学級会を通して、合意形成を図ることにより、自主的実践的な態度を育成する。	①児童が主体となったあいさつ運動、なかよし遊び、学級活動等に取り組んだか。 ②学校自己評価に係る思いやりに関する項目において、肯定的な回答の割合が児童アンケート95%以上、保護者アンケート95%以上、教員アンケート100%となったか。	①児童会担当教員が中心となり、児童が主体となったあいさつ運動、なかよし遊び、学級活動等に取り組んだ。 ②学校自己評価に係る思いやりに関する項目において、肯定的な回答の割合が児童アンケート98%、保護者アンケート98%、教員アンケートで100%となった。	A	①児童会の自主的実践的な態度をさらに向上させるため、児童会活動を自治的に行えるように指導する。 ②自助・共助の精神を日本赤十字社の青少年赤十字加盟校としての取組を行う中で、ボランティア精神をやしなひ、他者への思いやりの精神を育む。	
3	〈現状〉 ○防犯ボランティアの方々が、毎日、児童の登下校の安全の見守り活動やあいさつ運動に積極的に参加され、協力体制が整っている。 ○学習ボランティアやPTA役員等の保護者に教育活動や環境整備等支援いただいている。 ○学校運営協議会準備委員会が熱議を通してPTAや地域のボランティアの方との連携・協働した活動を実施している。 〈課題〉 ○PTA役員以外の保護者にもコミュニティ・スクールの一員としての意識を啓発し、連携・協働の機会を創出していく。	・ユネスコスクールとしての特色を生かした、地域との連携・協働による教育活動の展開	①教科横断的な学習活動の中で、ゲストティーチャーや学習ボランティアと連携・協働した教育活動を行う。 ②学校ウェブページのブログを通して、本校の学習活動や児童の取組について周知し、保護者の関心及び支援体制を高めていく。	①各学年ゲストティーチャーや学習ボランティアと連携・協働した教育活動を各学年1回以上実施したか。 ②学校自己評価に係るアンケートで、「児童の成長に対する関心が高まった。」と回答する割合が80%以上となったか。	①昔遊びや読み聞かせ等で各学年ゲストティーチャーや学習ボランティアと連携・協働した教育活動を各学年1回以上実施した。 ②学校自己評価に係るアンケートで、「児童の成長に対する関心が高まった。」と回答する割合が72%以上となった。	B	①ユネスコスクールとしての取組は、継承し、大宮八幡中等との取組と検討し、本市としてのユネスコスクールのアピールをさらに進める。 ②スクリーンによる写真等ビジュアルを重視した情報提供を進め、保護者の教育への関心を高めていく。	障害者支援施設しびらきの利用者さんと新開小の児童との交流があれば、とても素敵なことであるとを感じる。具体的に、しびらきベーカーリーで、児童と利用者さんが一緒にクッキーを作るなどの交流ができると、新開小の児童が地元をもっと知るという意味でもよいと思う。今年、新開小の特別支援学級の児童がしびらきファームに訪問することが一つのきっかけになることを願っています。
		・学校運営協議会とSSNが一体的に取り組む地域学校協働活動の推進	①学校運営協議会において、学校の支援体制について、持続可能な方法を検討し、効率的な学校支援にしていく。 ②学校支援ボランティアの新メンバーの掘り起こし策を学校運営協議会委員の意見を参考に取る。	①学校運営協議会は、持続可能な方法で保護者や地域が連携・協働する機会を創出できたか。 ②SSNは効率化を検討し、学校支援ボランティア体制を再構築して新規会員を増やせたか。	①学校運営協議会やSSN推進協議会において、地域防犯や家庭支援等について協議を行い、連携・協働する持続可能な方法について協議を行った。 ②邑元会しびらきとの連携協議を行い、教育活動における交流を始めることができた。	A	①児童の意見を学校運営に反映する。 ②邑元会しびらきとの連携や学区内のドローン活用農業従事者等との民間連携を進め、学校と連携・協働する持続可能な方法について進めていく。	
4	〈現状〉 ○児童用コンピュータのオクリンク、ムーブノート、Teams等を活用した授業ができています。 ○一人一人の実践発表が充実しており、お互いに学び合うよさを実感している。 〈課題〉 ○タブレットの活用方法は幅広く、より効果的な活用方法について研修・実践が必要である。	・エバンジェリストを中心としたメンター制度による、学び合い・高め合う教職員研修の実施	①校務の教育DXを進め、蓄積された教育データを活用し、効率的に教材研究を進めるなど業務改善を行う。 ②ペーパーレス化を進め、クラウドを活用したスマートな校務に改善する。 ③スタディサプリアドリルパークを活用した個々の学習進度に応じた学習を進める。	①エバンジェリストを中心とした教職員研修を年間4回以上実施できたか。 ②全教員がタブレットを活用した公開授業を一人2回以上実施できたか。 ③職員会議等でのペーパーレス化を60%以上達成したか。 ④スタディサプリアドリルパークの活用率を80%以上達成したか。	①エバンジェリストを中心とした教職員研修を2回実施し、通信を1回発行した。 ②全教員がタブレットを活用した公開授業を一人2回以上実施した。 ③7月以降の職員会議等でのペーパーレス化を実施した。 ④スタディサプリアドリルパークは、全校級で使用して活用率は100%である。	A	①ICT機器の管理を徹底し、コンピュータを活用した授業を深化する。 ②CANVAを積極的に活用した授業を行い、次年度アプリ改変に備える。 ③ペーパーレス化をさらに進める。 ④スタディサプリアドリルパークは、全校級で活用効果（学習内容の定着等）をさらに高める。	家庭への手紙の配付については、紙媒体ではなく、スクリーンレアプリでの配信となったことは、保護者からすると利便性が向上した。地域の中でも、ラミーユでは利用が広がっていることも一定の評価ができる。

